

## 震災後の子どもたち(8)

# 親の生活の再建を一刻も早く



田中 英雄

今回の震災が乳幼児に与えた精神的影響が量り知れないものである事は容易に予想されるものであるが、それが一体どのような全体像を形づくっているのかという事は、今後にまたなければならぬ。

それは、私の個人的状況からきている事も断っておかねばならない。

ちびくろ保育園は激震地より約五百メートルほどだろうか南に位置している事もあり、壊滅的打撃よ

りまぬかれた。一階の半分がピロティ構造になっていたので、もし、激震地にあれば倒壊していたか、大きな亀裂が入り結局は解体せざるを得なかったろう。そういう意味で多少の修復や耐震壁を今後の大地震を想定して設けたりせざるを得ない事はあったが、他に比べれば「無傷」に近かった。

自分の自宅が「全壊」状態であったので、保育園に移らざるを得ず、そうこうしている中に、全国か



らかけつけて来られたボランティアによって救援基地と化し、その様な渦の中から、「ちびくろ救援ぐるうぶ」が発足し、主に小規模な避難所六十か所の救援活動を手がけ、現在も各地にある仮設住宅に対するボランティア活動が精力的に続けられている。

それと平行して、永年取り組んで来た「ラミ中学校」（不登校や障害のある子どもでも、自由に生き生きと学び、生活する学校・魂の成長を大事にする）の設立（去年の十一月二十六日に開校）や、遊び場を失くした（ほとんどの公園は仮設住宅で埋まってしまった）子どもたちのための「須佐野子どもテント村」の運営など、震災以後の日々は震災以前と全く様相を異にしており、保育園の事にのみ精力を集中しておれば良いような日々などほとんどなかったに等しい。

その様な状況なので、十分に子どもたちの事が書けない事を断っておきたい。その上で限られた経験の中で感じた事のみ述べてみることにする。



▲全国からのボランティア（95，2，4）

## 地震で受けたショックの事について

保育園が救援活動に平行して保育を全面的に再開した二月一日、登園した子どもたちの表情は固く、からだも固くこわばっていた。中でも情緒障害的傾向のあるあー君は土気色をしており、母親のからだをたたき続けていた。また、地震時に二階にいてタンスの下敷きになった子は二階に寝ようとはせず（一階は危険なので）親を困らせたという。この恐怖は一年たった今でも大人である我々の中にもあるが、地震を頭で理解して納得させてしまう事をしない子どもたちには長く続いたものと思われる。地震後五か月近くもたった初夏のある夜、中学生で障害児学級に在籍するひで子ちゃんは、私がつたずねていったその日家の外の暗がりにも立ち続けていて、仲々中に入ろうとしなかった。母親に聞くと家の中に入るのをこわがっているとの事だった。四階建のマンションは骨組がしっかりしている故に倒壊せず



▲組み立てられた救援テントの中で遊ぶ

に立っているとはいえ他の家族は全ておらず、彼女の家族のみ住んでおり、内部が激しく破壊されたま

まの部屋の様子が無気味に見える状況から見て、彼女の恐怖の方が当然だと思えた。

再開した保育の中である保母が子どもたち一人ひとりと話しながら描いた壊れた家の様子は、子どもたちの受けた衝撃を如実に物語っていて、よくその中で大きな怪我もせず生きてこれたと感謝するばかりであった。

保育の再開を急いだ事は良かった。園庭やピロティの天井にまで山積みされた救援物資。五百人や千人程度の炊き出し作業が続いている日々の中で、保育を安全に行い得るかどうかなどの状況（救援活動はその後大急ぎで近くの公園への移設が完了したのであったが）があったが、救援活動と混在して保育があっても、いい面もあると考え決断した。

震災以後、子どもたちの遊び場はほとんどなくなったといっている。家の周囲はくずれかかったビルや家屋、その上に解体にもなう土ほこり、道路は渋滞しダンプの列が続く日々。公園という公園は

たとえ二棟であれ三棟であれ、建てる広さがあれば仮設住宅が建ち並んでいった。

三月の末に卒園した子どもたちの親が学校の入学までの二週間、一体どこで子どもを遊ばせればいいのかと悲鳴をあげた。その訴えに応えるために永年教育問題に取り組んで来た仲間と共に地域の子どもたちが自由に来て遊べる「須佐野子ども村」を急遽開設することになった。この「子ども村」は大うけで、地域の小学生たちが、喜んで集まるようになり、その後外国の救援組織の補助金も入ることになり、六月からは二名のスタッフを常駐させる事が出来るようになり、今日現在も続いている。

この「子ども村」のある公園は、当園から出発した「ちびくろ救援ぐるうぷ」の事務所や物資テントやボランティアの寝とまりする数多くのテント、それに被災した障害者たちを介護するプレハブと共同形仮設住宅が三棟も立ち並び、三〇〇坪の公園も今や、スペースが残り少ないのであるが、その空地

に手作りの巨大なすべり台や手作りプールも設けられ、それらの空間をぬって子どもたちは走りまわっている。地震直後どうだったかというのを「子ども村」のスタッフ丸さんは「子ども村だより四号」の中で次のように報告している。

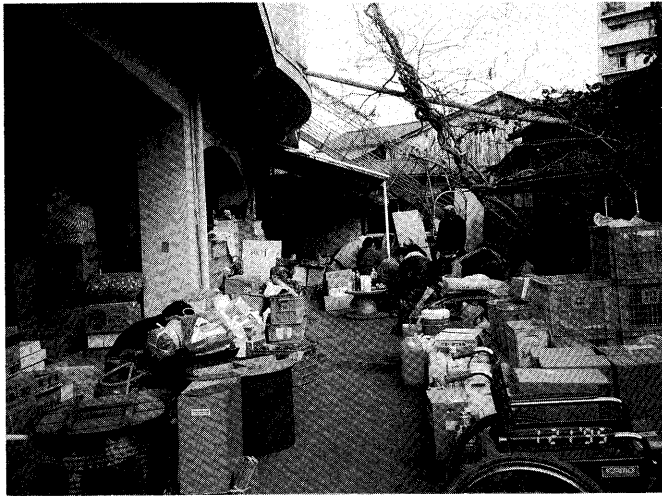
子ども村に来ている子のお母さんからこんな話をきいた。「あの子、今ではあんなにあそんでいるけど地震から三日間口がきけなかったんですよ」その子の家はマンションのかなり上の階だったらしく、地震の時、その子の目に映った恐怖というのは、はかり知れないものであったと思われる。そんな彼も子ども村では木工あそび大得意の一人である。……けれど日常の表情の奥にしまっているんだ傷やショックを彼らなりに一年という時間の中で癒してきたのではないだろうか。

### 親子双方へのアプローチ

子どもたちの「心のケア」の必要性が叫ばれる

けれども、親の生活の再建と切り離して考えられないケースも多い。

この夏、たしか八月十五日の事だったが、「ひろしまのピカ」を保育園の子どもたちに読んでいた時のこと。長田で震災により家が傾いてしまった三歳の女の子が口を開き、とめどもなく語り出した。おじいちゃんと近くの学校に逃げた事。家のまわりの家という家は燃えてしまった事、その子の家は鉄筋コンクリートだったので助かったが傾いてしまった事。余程恐ろしかった体験が「ひろしまのピカ」と重なったのであろう。読み進むにつれ、彼女もよどみなく自らの体験を語るので何度も読むのを中断せざるを得なかった。紅蓮の炎から逃げまどう母子の姿はまさにその子の体験であった。原爆が生み出した地獄絵図は、五十年を経てその小さな子の眼前に生きて顕われた。からだの中にとまった恐怖を一気に吐き出せたのか、しゃべり終えホッと息をついた様子が忘れられない。



▲救援物資が続々と届いた (95, 1, 21)

四月にその子の家を訪れた時、巾五メートルぐらの小さな三階建の家は、二階に入り坐っていると気分が悪くなる程傾いていた。ジャッキアップして

修理する費用は何千万円もかかるし、仮にそうしたとしても区画整理にかかっているので将来はビルは取り壊されるかも知れず途方にくれておられた。

それで、本格的解決はともかくとして、台所と居間の床のみを補正する床を新たに取付け急場を解決する事で大変喜んでもらった。親が途方にくれ不安であると子どももその不安に満たされていく。親子双方へのアプローチが不可欠である。その部屋にいる丈で気分の悪くなるような、至る処の壁が破壊されているマンションに住む親子はダブルローンに苦しんでいるのだろう。長く欠席が続く。

義援金を一番沢山もらった人でも全額で四十五万円！ 一体これでどうして生活の再建が可能だろうか。現行の災害救助法では、個人補償は出来ない。新しい制度の創出によって一刻も早く、再建不可能な人々を救ってほしいと切に切に望む次第である。

(ちびくろ保育園)